

水稻新品種「しまねにしき」について

小村康治*・神田正治*・横井謙二郎*¹⁾・伊藤周三*²⁾・北山 茂**³⁾
 高海幸夫**・重栖睦弘**・新田英雄***・名古屋二***

On the New Paddy Rice Variety "Shimanenishiki"

Koji OMURA, Masaharu KANDA, Kenjiro YOKOI, Shuzo ITO, Shigeru KITAYAMA,
 Sathio TAKAMI, Nobuhiro OMOSO, Hideo NITTA and Yoji NAKO.

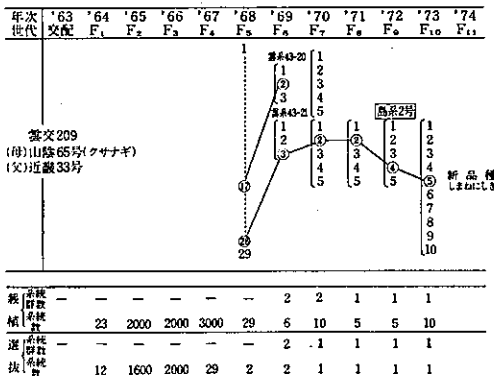
はじめに

「しまねにしき」は1973年で育成を終り、'74年より本県の奨励品種に採用され、従来からの奨励品種、近畿33号に替えて普及することになった。そこで本品種の育成経過および特性について述べ参考に供する。

この品種の選定にあたって県内の現地試験を担当され、調査に協力いただいた関係農林改良普及所の諸氏に衷心より謝意を表する。

I 育成経過

育成経過は第1図に示した。以下世代を追って概要を記述する。



注 F₁~F₄の系統数個は個体数を示す。

第1図

交配(1963): 当場において「山陰65号」(1964年にクサナギと命名された)を母とし「近畿33号」を父として人工交配を行なった。この組合せの育種目標は、クサナギの強稈と多収性を生かし、これに近畿33号の良質と白葉枯病、カラバエの耐病虫性を付与すること、また、父本の側からは近畿33号の大きな欠点である下葉の枯上りが多く、倒伏の弱い点をクサナギの強稈で補完することであった。したがって各世代における系統選抜の着眼は、当場は場の白葉枯病の発生しやすい環境を生かしながら、稈性と品質に重点をおいて行なった。

F₁(1964): 両親とともに1本植にした。途中、生育観察と生育調査を行ない、雑種であることを確認し、次代に必要な採種を行なった。

F₂(1965): 当場ほ場に約2,000個体を1本植し、分離状況を観察した。出穂期、草型の分離は比較的少なく、中生の中稈ないしやや長稈個体が多く、中げつで並穂、草の姿は両親の中間ないし近畿33号に近く、草はやや繊細であるが稈性が良く、目標とする系統の選抜がある程度期待された。長稈個体を除いて各個体から抜穂し、混合採種した。

F₃(1966): この世代は苗代に放置して無選抜とし、各個体より等粒ずつ混合採種した。

F₄(1967): 約3,000個体を1本植して個体選抜を実施した。出穂の分離は早生から中晩生まであり、中生種が多く、全般に長稈で草は近畿33号に似て熟色不良の個体が多かった。ほ場では早生ないし中生で得長

* 育種科 ** 作物科 *** 赤名分場

1) 現島根県立博物館

2) 現島根県農林総合研修所

3) 現島根県農業改良課

が比較的低く、熟色が良く、稔実の良い個体を選抜し、さらに室内で品質について強い選抜を加えた。したがって最終には29個体の僅少数にとどまった。

F₅ (1968) : 29系統を系統栽培した。出穂その他の実用的形質について分離した系統はなく、熟期は近畿33号、ヤマビコ級で、草の姿は両親の中間ないしくサナギに近く、中ないし中の長稈で、穂重型が多く、一般的に白葉枯病耐病性が近畿33号に劣り、また、耐倒伏性の点でクサナギに劣る系統が多かった。この中から比較的稈長が低く、白葉枯病の少ない2系統を選抜した。

F₆ (1969) : 2系統群6系統を栽植し、同時に葉いもちおよび穂いもち検定試験に供試した。

系統栽培では2群とも表現形での分離は見られず、実用的にはほぼ固定したものと認められた。いもち病は両親の耐病性からして高度の耐病性は期待できず、検定の結果は近畿33号と同程度のやや弱であった。2系統群2系統を選抜継続した。

F₇ (1970) : 系統栽培のほか生産力検定試験に供試し、草状、稈性、収量性、品質について検討するとともに、特性検定を拡大し、いもち病のほか白葉枯病および穂発芽性についても実施した。

供試2系統は草状その他の諸特性が近似しており、出穂期は近畿33号とほぼ同じで、草の姿はクサナギに近く、中の短稈、稈性も良く、中げつ、並穂、収量性は比較的高く良質であった。2系統のうち「雲系43-20」は腹白が発生し品質の点でやや劣ったので、他の特性も考慮して廃棄することにした。

F₈ (1971) 以降：系統栽培を継続するとともに、'71年には奨励品種決定予備試験に供試した。試験成績は近畿33号に比較して下葉の枯上りが少なく、強稈で、品質の点でも優れていることが認められたので、翌'72年からは「島系2号」の系統名を付し、奨励品種決定本試験に編入するとともに、當場赤名分場お

第1表 特性調査成績 (農試本場)

品種名	稈		芒		稈色	稈先色	粒着疎密	脱粒難易	粒形	粒大
	細太	剛柔	多少	長短						
しまねにしき	中	中	少	短	白	白	中	難	中	ヤ大
(比)近畿33号	中細	中	少	短	白	白	中	難	中	ヤ大
(比)日本晴	中	ヤ剛	少	短	白	白	ヤ密	難	中	中

び県内の現地試験に供試し、地域適応性をあわせ検討した。その結果、好成績を示したので、'74年2月開かれた品種審議会にはかり、奨励品種に採用が決定し、「しまねにしき」と命名された。

Ⅱ 特 性

1 一般特性

本県では早生種に属し、中の短稈、中げつの中間型稈種である。

出穂期は近畿33号、日本晴と同じであるが、成熟期はこれらの品種よりわずかに早く、山間部で栽培した場合はさらに早まるようである。

稈長は近畿33号より7cm程度低く、日本晴よりは高く、ほぼ両者の中間である。稈の太さは中位で稈質は良く、穂数は前2品種よりやや少なく、粒着は近畿33号に似てあまり多くない。短芒を有し、稈および稈先色は白で、脱粒は難である。

草の姿は近畿33号よりはクサナギに近く、これより全体にやや小筋となり、出穂当時は稈が直立して草状は良く、葉色は普通で、葉身は日本晴よりやや狭く、止葉の葉立性も良い。また下葉の枯上りは近畿33号より少なく、成熟期の熟色は良い (第1表、第2表、第3表)。

2 病害虫、倒伏抵抗性その他

(1) いもち病

葉いもちは1968年 (F₅) より、穂いもちを'69年より、それぞれ耐病性を検定した。

その結果、葉、穂いもちともほぼ近畿33号と同程度でやや弱と判定され、十分とはいえない。したがって平坦部、中山間部の普通田ではまず心配はないが、肥沃地、極端な多肥栽培および日照不足田等では、耕種面のほか薬剤による適期防除を心掛ける必要がある (第4表、第5表)。

第2表 生育観察および生育調査成績 (農試本場)

栽培法	品種名	試験年次	出穂期 月日	成熟期 月日	結実 日数	障害・病害の多少			稈長 cm	穂長 cm	穂数 本
						倒伏	下葉枯	白葉枯病			
	しまねにしき	'70	8.13	9.21	39	4	3	4	89	20.3	18.5
		'71	8.19	10.2	44	1	3	2~3	90	19.0	16.8
		'72	8.18	9.29	42	1	3	2~3	87	19.6	15.0
		'73	8.12	9.25	44	1	3	0~1	86	21.4	15.8
		平均	8.16	9.27	42	2	3	2~3	88	20.1	16.5
早植	(比)近畿33号	'70	8.16	9.26	41	5	3	1	102	20.1	20.1
		'71	8.18	10.5	48	3~4	3~4	1	96	18.1	17.4
		'72	8.18	10.2	45	2	4	1	92	18.9	15.3
		'73	8.12	9.24	43	2	4	0	90	20.3	16.9
		平均	8.16	9.29	44	3	4	1	95	19.4	17.4
	(比)日本晴	'70	8.15	9.26	42	2	2	3	87	20.8	19.9
		'71	8.18	10.2	45	0~1	3	2~3	83	19.0	16.8
		'72	8.18	10.1	44	0	3	2	78	20.2	15.3
		'73	8.12	9.23	42	1	2~3	0~1	81	20.8	17.3
		平均	8.16	9.28	43	1	3	2	82	20.2	17.3
多肥	しまねにしき	'70	8.13	9.23	41	3	3	2	85	20.6	21.4
	(比)近畿33号		8.15	9.28	44	4	3	1	95	19.7	21.2
	(比)日本晴		8.14	9.29	46	3	3	1	83	21.2	21.8
稚苗	しまねにしき	'72	8.16	9.25	40	1~2	2	2	88	18.4	499*
	(比)近畿33号		8.16	9.28	43	2	3~4	1	93	17.7	523*
	(比)日本晴		'73	8.15	9.26	42	0	2~3	2	83	18.7
普通植	しまねにしき	'72	8.27	10.10	44	1	3	1~2	76	18.6	16.9
	(比)近畿33号		8.28	10.11	44	2	4	1	81	17.2	18.7
	(比)日本晴		'73	8.29	10.11	43	0	3	2	73	19.6

注) 1 稚苗、普通植栽培は1972、'73の平均。
2 倒伏は0(△)-6(全倒)、下葉枯、病害は0(△)-6(激甚)で示す。
3 *はm²当り穂数。

第3表 生育観察および生育調査成績 (農試赤名分場)

栽培法	品種名	試験年次	出穂期 月日	成熟期 月日	結実 日数	障害、病虫害の多少			稈長 cm	穂長 cm	穂数 本
						倒伏	穂いもち	カラバエ			
	しまねにしき	'72	8.19	10.9	51	0	0~1	1	75	18.3	16.7
		'73	8.14	9.30	47	0	3	2	85	20.0	19.1
		平均	8.17	10.5	49	0	2	1~2	80	19.2	17.9
標準	(比)近畿33号	'72	8.20	10.12	53	0	1~2	2	83	16.9	19.5
		'73	8.15	10.8	54	0	2~3	3	94	19.2	21.1
		平均	8.18	10.10	53	0	2	2~3	89	17.6	20.3
	(比)日本晴	'72	8.20	10.13	54	0	0	1	73	18.7	17.7
		'73	8.14	10.6	53	0	2	3	81	20.7	20.9
		平均	8.17	10.10	54	0	1	2	77	19.7	19.3
多肥	しまねにしき	'73	8.13	9.29	47	0	2	2	82	19.5	19.7
	(比)近畿33号		8.14	10.7	54	0	2~3	3	93	18.4	23.0
	(比)日本晴		8.14	10.3	50	0	1	4	82	20.5	20.5
稚苗	しまねにしき	'73	8.16	10.5	50	0	3	1	78	18.6	17.5
	(比)近畿33号		8.17	10.10	54	0	2	3	86	18.5	18.4
	(比)日本晴		8.16	10.10	55	0	1	3	73	20.2	16.4

注) 障害、病虫害欄の等級は第2表に同じ。

第4表 いもち病耐病性検定試験成績
(葉いもち, 農試本場)

品種名	年次				
	'69	'70	'71	'72	'73
しまねにしき	5	4	4	4	4
(比)近畿33号	5	4	4~5	3	4
(比)日本晴	4	4	3~4	4	4

注) 耐病性分級 0...強 1...強 2...+強
3...中 4...+弱 5...弱
6...弱 以下第6表まで共通

第5表 いもち病耐病性検定試験成績 (穂いもち)

場所 年次	農 試 本 場					同赤名分場		
	'69	'70	'71	'72	'73	'69	'70	'73
しまねにしき	4~5	4	4~5	3	3~4	0	2	2~3
(比)近畿33号	3	5	4~5	4	3~4	1	4	2
(比)日本晴	1~2	2	2~3	3	1~2	0	3	1

第6表 白葉枯病耐病性検定試験成績
(1970, 農試本場)

品 種 名	耐 病 性
しまねにしき	3
(比)近畿33号	2
(比)日本晴	3~4
(比)ヤマビコ	5
(比)クサブエ	5~6

注) 耐病性は成熟期における上位3葉の病斑面積率より判定した。
0...0 1...1/20以上
2...1/20~1/10 3...1/10~1/3
4...1/3~2/3 5...2/3以上
6...10/10

第7表 カラバエ耐虫性検定試験 (1973)

品種名	場所	農 試 赤 名 分 場	大 東 町
しまねにしき		少	15.0
(比)近畿33号		少~中	83.3
(比)日本晴		少~中	80.0

注) 1 農試赤名分場は観察調査。
2 大東町は傷穂株率(%)。

(2) 白葉枯病

1970年みの検定であるが、その結果は中位の耐病性と判定され、日本晴と同程度で近畿33号より弱く、ヤマビコよりは強い(第6表)。また農試本場における生産力検定試験の累年の立毛観察結果もほぼ同じで(第2表) いもち病と同様耐病性は十分とはいえない。

(8) カラバエ

1973年に当場赤名分場および大原郡大東町の現地試験で調査した。大東町では近畿33号、日本晴より明らかに低い傷穂率を示し、また赤名分場の調査も両品種より傷穂が少なく、やや強と判定された(第7表)。

(4) 倒伏

耐倒伏性についての検定はないが、農試本場での各年の立毛観察では日本晴に近い抵抗性を示し、近畿33号よりは明らかに強いと見られた(第2表)。このことは県内現地試験の調査も含めた全試験の符号検定(第17表)によってもうかがうことができる。

(5) 穂発芽性

1970年以降4か年の調査結果は近畿33号と同程度で「易」と判定された。したがって風通しの悪い山あいの谷田等の栽培では注意したい(第8表)。

第8表 穂発芽性検定試験成績 (農試本場)

品種名	年次			
	'70	'71	'72	'73
しまねにしき	4	5	5	5
(比)近畿33号	5	4~5	5	5
(比)日本晴	2	2	5	2

注) 穂発芽性は0(難) - 6(易)で示す。

3 収量および品質

農試本場においては1969年より、同赤名分場および現地試験では'72年より調査を行なった。

その成績は第9表から第16表に示した。

まず収量については日本晴にはわずかに劣るようであるが、近畿33号とはほぼ同程度の収量成績を示し、良質品種としてはかなり高い収量性を持っているといえる。このことは全試験の収量調査をまとめた符号検定の結果(第17表)によってもうかがうことができる。

玄米は中形のやや大粒で、千粒重は日本晴より重く、近畿33号とほぼ同じである。また腹白、心白の発生がきわめて少なく、光沢があり、品質は両品種よりやや上位と判定され、ごく良質である。搗精歩留まり

第9表 収量および品質調査成績 (農試本場)

栽培法	品 種 名	試験年次	a 当り玄米重 kg	同左比率 %	精歩合 %	粗摺歩合 %	玄米1kg重 g	玄米千粒重 g	心白多少	腹白多少	品質
		'71	53.5	96	45.4	81.2	840	23.5	ム~ゴビ	ゴビ~ビ	4
		'72	56.5	100	47.3	80.9	839	24.9	ム~ゴビ	ゴビ~ビ	3~4
		'73	58.7	100	46.5	81.1	849	25.0	ム	少	3
		平均	55.0	100			834	24.0	ム	ビ	3~4
	(比)近畿33号	'70	50.4	100	—	—	803	22.4	ム~少	ビ~少	4
		'71	55.4	100	45.8	81.1	832	23.4	ゴビ	少~中	4
		'72	56.4	100	48.3	80.4	829	24.8	ゴビ	少~中	4~5
		'73	58.7	100	47.8	81.2	839	25.2	ム~ゴビ	少~中	4~5
		平均	55.2	100			826	24.0	ゴビ~ビ	少~中	4
	(比)日本晴	'70	53.8	107	—	—	815	22.1	ム	ビ	4
		'71	52.7	95	46.2	80.8	845	22.1	ゴビ	少~中	4
		'72	57.0	101	48.7	81.3	838	23.4	ゴビ	少~中	4
		'73	60.2	103	47.5	80.5	844	23.9	ム	中	4~5
		平均	55.9	102			836	22.9	ム~ゴビ	少~中	4
多肥	しまねにしき	'70	53.4	101	—	—	820	22.6	ム	ビ~少	4
	(比)近畿33号		52.8	100	—	—	800	22.7	少	少	4~5
	(比)日本晴		56.4	107	—	—	820	21.8	ビ	少	4
稚苗	しまねにしき	'72	48.0	103	40.2	79.6	830	23.7	ビ	ム	2
	(比)近畿33号	'73	47.8	100	39.9	79.4	824	24.1	ビ~少	ビ	2~3
	(比)日本晴	'73	48.2	103	40.3	80.0	839	22.5	ビ~少	ビ	3
普通植	しまねにしき	'72	48.7	100	48.8	82.0	843	24.2	ム	ム	3
	(比)近畿33号	'73	48.9	100	49.3	81.3	836	24.5	ム~ビ	ビ	3
	(比)日本晴	'73	50.2	103	49.7	82.3	841	23.0	ム	ビ	3~4

注) 1 稚苗、普通植栽培は1972, '73の平均。
2 品質は1(上) ... 9(下)で示す。

第10表 収量および品質調査成績 (農試赤名分場)

栽培法	品 種 名	試験年次	a 当り玄米重 kg	同左比率 %	精歩合 %	粗摺歩合 %	玄米1kg重 g	玄米千粒重 g	心白多少	腹白多少	品質
		'73	62.1	98	79	800	25.1	ム	ム~ビ	3	
		平均	61.0	100	82	818	25.0	ム	ム	3~4	
	(比)近畿33号	'72	59.1	100	83	835	25.1	ム	ビ	4~5	
		'73	63.1	100	79	797	25.5	ビ	ビ~少	4~5	
		平均	61.1	100	82	816	25.3	ム~ビ	ビ	4~5	
	(比)日本晴	'72	57.4	97	84	839	23.7	ム	ム	5	
		'73	64.3	102	80	811	24.0	ム	ビ~少	4	
		平均	60.9	100	82	825	23.9	ム	ビ	4~5	
多肥	しまねにしき	'73	65.7	99	81	807	25.2	ム	ム	3~4	
	(比)近畿33号		66.7	100	80	812	23.9	ム	ビ	3~4	
	(比)日本晴		67.5	101	81	822	25.3	ム	ビ~少	3~4	
稚苗	しまねにしき	'73	63.5	106	82	800	25.7	ム	ビ	4	
	(比)近畿33号		60.1	100	81	814	26.4	ム	中	5	
	(比)日本晴		60.5	101	81	830	24.4	ム	少	5	

注) 品質欄の分級は第9表と同じ。

第11表 玄米調査成績 (農試本場)

品 種 名	千粒重 g	粒長 mm	粒幅 mm	粒厚 mm	粒長:粒幅	粒長×粒幅 mm ²	心白歩合 %	腹白歩合 %
しまねにしき	25.0	5.70	3.14	2.16	1.81	17.9	0.3	16.5
(比)近畿33号	25.0	5.57	3.20	2.18	1.74	17.8	1.7	33.1
(比)日本晴	23.5	5.50	3.12	2.14	1.78	17.3	7.5	34.5

注) 1 '71~'73の3年平均。
2 心白, 腹白歩合は粒数歩合。

第12表 搗精試験成績 (KettTP-2型, 農試本場)

品 種 名	産米 年次	玄米水分 %	搗精時間 分秒	搗精歩 留まり %
しまねにしき	'71	14.0	2.30	91.6
	'73	13.4	1.30	91.5
(比)近畿33号	'71	13.8	2.30	91.5
	'73	13.4	1.30	91.4
(比)日本晴	'71	14.0	2.30	91.5
	'73	13.4	1.30	91.4

注) 標準米をもって搗精度をそろえた。

第14表 食味検定試験成績 (農試本場)

期 日	品 種 名	食 味 の 総 合 評 価								平均値	判 定	パネル数 名	
		-4	-3	-2	-1	0	1	2	3				4
'73.1	しまねにしき	0	0	1	5	6	1	1	0	0	-0.29	差なし	14
	(比)近畿33号	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	(比)日本晴	0	0	0	4	4	6	0	0	0	-0.14	差なし	
'73.1	しまねにしき	0	0	0	1	8	2	0	0	0	-0.09	差なし	11
	(比)近畿33号	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	(比)日本晴	0	0	0	4	6	1	0	0	0	-0.27	差なし	

注) 1 1972年産米について近畿33号を基準として食糧研究所試験方法による。
2 評価基準: 優(+)劣(-)として次の基準による。
0-同じ 1-わずかに 2-やや 3-よい(わるい) 4-明らかに

第15表 食味検定試験成績 (高根産米改良協会1974.1)

品 種 名	食 味 の 総 合 評 価								平均値	判 定	
	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3			4
しまねにしき	0	0	1	6	8	7	1	1	0	0.17	差なし
(比)近畿33号	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

注) 1 1973年産米について近畿33号を基準とし, パネル数24名によって食糧研究所試験法による。
2 評価基準は第14表に同じ。

第13表 搗精試験成績 (サタケワンパスOM, 1973年)

品 種 名	搗 精 歩 留 まり %	
	農試本場	同赤名分場
しまねにしき	90.8	91.0
(比)近畿33号	90.7	90.8
(比)日本晴	90.6	91.3

注) 抵抗重量は同一とした。

第16表 現地試験成績 (要約)

地 帯 別	試験地	試験 年次	しまねにしき			近畿33号			日 本 晴			
			収量 kg	比率 %	品質	収量 kg	比率 %	品質	収量 kg	比率 %	品質	
山 出 雲	掛合町	'72	65.2	99	3	65.8	100	4	67.9	103	2	
		'73	76.0	99	—	76.8	100	—	82.2	107	—	
	大東町	'72	67.0	104	3	64.4	100	5	66.4	103	5	
		'73	71.2	100	3	71.2	100	5	74.0	104	5	
	平 出 雲	川本町	'73	71.8	113	5	63.6	100	4	71.8	113	4
			旭 町	'73	65.0	92	3	—	—	—	70.6	100
美都町		'73	72.1	105	2	68.7	100	3	70.1	102	4	
		六日市町	'72	61.2	87	6	70.4	100	4~5	69.7	99	5
		'73	51.5	99	3	52.1	100	5	60.4	116	6	
部 石 見	安来市	'72	65.5	94	4	69.7	100	6	41.8	103	5	
		'73	65.5	91	3	72.1	100	3	64.2	89	2	
	宍道町	'72	48.8	75	—	65.1	100	—	69.6	107	—	
		'73	71.1	101	4	70.4	100	5	64.1	91	4	
	斐川町	'72	65.0	99	4	65.7	100	5	68.4	104	4	
		'73	71.0	103	4	69.1	100	5	64.2	93	5	
部 石 見	仁摩町	'72	49.0	109	—	44.8	100	—	46.2	103	—	
		'73	59.4	103	4	57.7	100	6	63.5	110	6	
	益田市	'72	61.4	105	4	58.4	100	4	56.0	111	5	
		'73	62.3	97	3	64.2	100	5	62.2	97	4	
隠岐島	西郷町	'72	39.8	76	6	53.4	100	6	52.4	98	5	

注) 収量はa当り精粒重。

第17表 試験成績の総括
—比較品種に対する諸形質の評価— 1969年~'73年

形質	品種 符号	近 畿 3 3 号			日 本 晴		
		+	0	-	+	0	-
収 量		15	3	16	11	4	19
品 質		18**	8	2	15	8	6
倒 伏		19**	13	1	9	16	7
下 葉 枯		24**	3	1	7	14	7
白 葉 枯 病		1	10	12**	0	14	9
紋 枯 病		8	15	2	2	20	5
ごま葉枯病		8	15	3	15**	11	1

注) 1 符号欄, 諸形質に関し「しまねにしき」が比較品種よりすぐれている場合(+)同等の評価の場合を(0)劣っている場合を(-)とし数字は試験点数を示す。
2 有意性の検定は符号検定による(**1%, *5%で有意)。

については農試本場ならびに同赤名分場において、「Kett」および「ワンパス」を使って調査したが、いずれも比較品種と差異がなく、歩留まりは高かった。食味については1972年産米を用いて農試本場で、また、'73年産米について県産米改良協会パネルテストを行なった。その結果はいずれも美味とされている近畿33号と比較して劣らないことが認められた。

Ⅷ 適地および栽培上の注意

本品種の熟期から見て一応平坦部から山間部まで栽培が可能であるが、標高の高い山間高冷地では収量が不安定になりやすい。したがって、主として平坦部から中山間部を対象に普及し、これら地帯の地力中肥地からやや肥沃地の早植栽培、稚苗移植栽培に好適する。

栽培にあたっては、この品種の特性として穂数があり多くなく、また1穂着粒数も多くないので、収量を安定、向上させる上から健苗の育成、活着の促進などに留意し、早期に多数の分けつを確保するよう努め

る。穂発芽性は近畿33号なみの「易」であるため、刈り遅れないよう注意する。耐倒伏性は日本晴ほど強くないので、肥沃地および多肥栽培は避けたがよく、また白葉枯病の多発地は避ける。さらに、いもち病耐病性が十分でないので常発地、多肥、晩植栽培などでは適期に薬剤防除を行なう必要がある。

Ⅳ 摘 要

本品種は1963年当場において「山陰65号」（クサナギ）を母とし「近畿33号」を父として人工交配を行ない、その後代から育成された。1972年より「島系2号」の系統名で奨励品種決定本調査および県内の現地試験に供試し検討してきた。その結果好成績を示したので、'74年より本県の奨励品種に採用し、品種名を「しまねにしき」と命名した。

この品種の特性および栽培適地は次のとおりである。

出穂期は近畿33号、日本晴とほぼ同じであるが、成熟期はこれらの品種よりいくぶん早まり、本県では早生種に属する。中の短稈、中げつの中間型梗種で、草は山陰65号（クサナギ）に近く草状・熟色良く、並穂

で、短芒を有し、脱粒は難である。

玄米は中形のやや大粒で、品質・食味ともよく、収量性は近畿33号と同程度で、良質品種としてはかなりの多収性をもっている。

いもち病耐病性、穂発芽性はともに近畿33号と同程度で十分ではなく、また白葉枯病その他の病害には中位の耐病性をもっている。イネカラバエにはやや強い。耐倒伏性は日本晴に近く、近畿33号よりは明らかに強い。

本品種は主として平坦部から中山間部の地力中庸地ないしやや肥沃地の早植栽培および稚苗移植栽培に好適する。極端な多肥栽培や白葉枯病の常習多発地での栽培は避け、またいもち病の常発地では適期の薬剤防除を行なう必要がある。

〔附〕しまねにしきは、その育成過程で組織の変更があり、1970年までは農林省の指定試験地として国の育種事業の一部を分担したが、諸般の事情により廃止となり、'71年からは本県単独の試験として行なうことになったことを付記しておく。

Summary

The new paddy rice variety "Shimanenishiki" was bred up by the bulk method in this station, from the hybrid between "Sanin No. 65" and "Kinki No. 33", crossed in 1963. Test for recommended varieties as line name, "Shimakei No. 2", has been performed since 1971.

It was adapted as the recommended variety in Shimane prefecture in 1974.

The main characters and adaptable regions of the new variety will be as follows. The maturing time in Shimane prefecture is early variety, similarly to "Kinki No. 33" and "Nipponbare". The plant type is intermediate type similarly to "Kusanagi", having middle-short calm length. The heads are intermediate, the density of grain is medium and good in repening. Unhulled rice has short awn, spikelets are hard to shed.

Shape of hulled rice is intermediate type and is approximately larger, not having white center and white belly, excellent in grain quality or cooking test.

The productivity is not always higher, similarly to "Kinki No. 33" but this variety will show to be higher productive in many varieties with good grain quality.

The resistance against the blast disease and viviparity is not satisfactory same as

"Kinki No. 33". The bacterial leaf blight and other diseases is intermediate, without showing the resistance against rice stem maggot.

The lodging resistance is much vigorous than "Kinki No. 33" and similar to "Nipponbare".

This variety will be adapted to early planting and young seedling culture in approximately fertile and usual land all over plains or piedmonts.

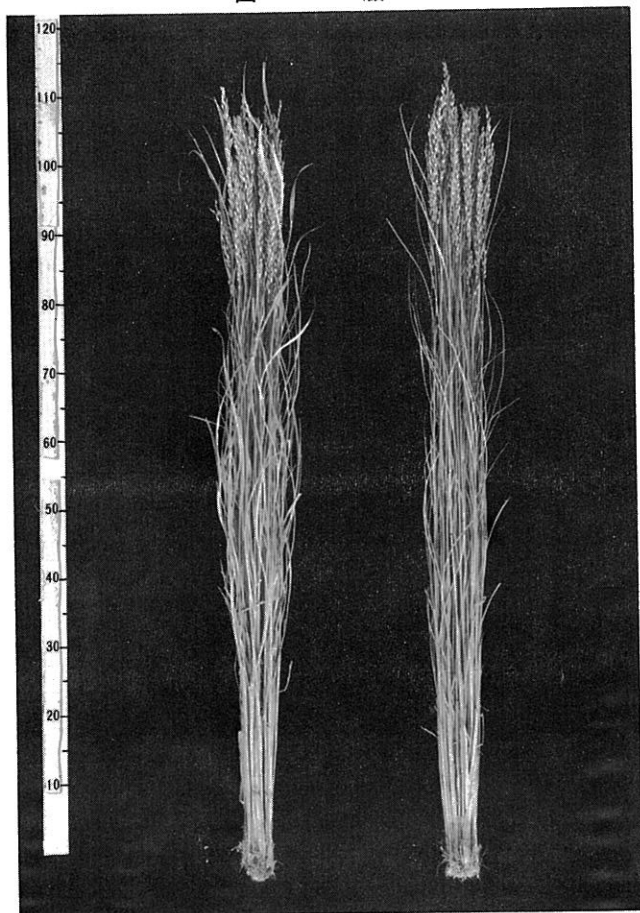
This variety should not be planted in much fertilization of nitrogen and in habitual land of bacterial leaf blight. It is important to spread pesticide in early development blast disease in habitual land of blast disease.

図 版 説 明

「しまねにしき」と比較品種

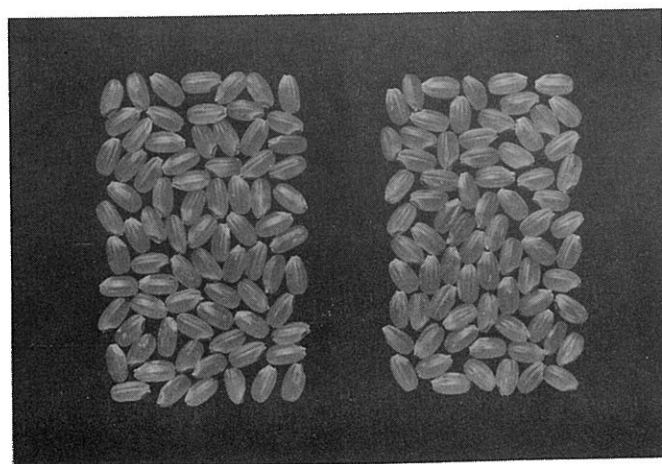
A, a しまねにしき B, b 近畿33号

图 版



A

B



a

b